



凡例

- 一 この日記を何とかなつ名付くべきと、くさぐさ考へたれど、
とみ頼によろしき名をもおもひ出ねば、先はまじじめに出せる
- 一 高崎正風高崎正風ぬしの歌によりて「みともの数」と名つけぬ。
- 一 行在所、御小休所、大かたは記しるしたれど、いふべきこと
おほく多て、中には記しるしつけぬもあり。また時刻のこと
さまざま多にするして一様ならぬも多し。こは此ふひとの
公記あれば、それに譲りて大むねをあげぬ。
- 一 名所旧跡の考へ、又詞のうちにあだし書引をひきたるに、
ことぐくあげんは煩しければ、わづかに其詞をつみ摘て
しるせるも多し、またよく人のしりたらんことは、いよ愈々
ことそぎ割たるもあり。されど其書のこころたしか
ならねばわかたき所はみな頭書記にするして
みやす見からしむ。
- 一 学校生徒の迎入奉れる、ところぐく同じさまなれば
はぶ省きてしるさぬもあり。されど、ことに賑は記しく
めとまる所々はかきしるしぬ。所によりては一校のみ
にもあらず、あまた数多の学校より旗おしたて、其校の

名^記どもし^記したるもおほかりしかども、ひとつく
かき^書するすいとまなくて、はぶきたるもおほく
忘れたるも少なからず。

一 歌は、人々のはことく其名を出せり。名をし^記
さぬは、みなおのがえせうたなり。

一 からうた多くつくりたれど、おのがはひとつも
あげず、人の巻の中^掌にあげたるもあり、末に附録に
して出せるもあり、又絵の上^記にしているもあり。

一 絵は其所々の真景をうつしたれど、車にうちのりて
すみやかに馳過たれば、其あらましをふとこころ紙に
かきたるもの多く、ふたたびこれにのするをり、かきひが
めたるもおほかるべし。藤波侍従、加部殿夫を除く
外はしたかきを友だちにわかちて、あつらへたるも
ありて、猶とおほゆるもあれど、其まゝ出しつ。名をし^記
さぬはおのがかけるなり。

明治十三年九月 池原香釋^記するす

みともの数 卷一

池原香釋 述

うちしきりたるさみだれの、晴ままちえて、ことし^打
明治十三年の夏、山梨の県より、長野・岐阜・愛智・
三重・滋賀のあがたどもを経て、京都へめぐりたま
はんのあらましありて、六月十六日といふ日を、かし^立
またちの日と定めましつれば、みともの人々おの
がじし^{装束}そそぎて、けふ^{今日}をはれと出たつ。その
みそなへのついでには、警視官みさきつかへまつり、
次に騎兵二小队、次に御旗、次に近衛士官、次に
鳳輦、次に東伏見二品親王、次に騎兵、次に侍従長、侍
従、侍医、次に宮内卿輔、皇太后宮大夫、皇后宮
大夫、式部頭、宮内書記官、式部助、掌典等、其次に
伏見二品親王、三条太政大臣、山田参議、三浦陸軍
中将、其他各官省供奉の書記官等、いづれも馬車

③上

にてつかへまつり、ひきつゞきて奉送の皇族、大臣
仕 参議、在京勅任官、麿香問祇候等、いと夥し。おの
 れもその末つかたのつらなれば、暁ふかく起出て
灯 ともし火のもとに朝げたうべて、四時ばかりに
 大宮のうち内にまうのぼる。御門いまだあかねば
 しばし待てたゞ付ずむほど、高崎正風きたれり。
 うちつれて同じつめ所にいりぬ。このぬし歌
連 ひとつうたひておくひらる。

おもふ友 みよもの数にいらぬるは わがゆへ
想 御 供 入 心 我 行

よりのも 嬉しかりけり このころは、こたびの御
供 初 云 合 昔 一 人 召 今 度

ともには、わが文学掛のものはひとりもめされず
 と、はじめいひあへるのみならず、わがとも
実 事 我 友 心

げにわぬいとにこそとて、たれもくしかころ
得 更 補 誰 然 心

えて、せらにその心がまへする人なかりしに、五月の
 なかば半にや有けむ、ゆへらなくおのれをめされて
共 加 今 度 召

御よもの書共は入給ひ、こたびの道の記、書

③下

しるすべきよし、おほせことあり。同じ文学の
掛 かけりなる加部巖夫もともなふべきよしなれば、
更 今さらのやうに驚かれて、かつはいとかし更く
且 かつはいとうれしく、何くれと旅の調度なごとり
調 とこのへなどするを、正風ぬしは、たびく御とも
仕 つかへまつられて、いとよくなれたれば、かれは
然 反 しかく、くれはかうくなんあるべき、などをし入
論 さとせるくに、たよりをえて、何事もとひたぐし
懸 類 得 語 問 糺 教
 などするを、なんころにあひかたらひて、とみに
旅 旅のよそひなりぬれば、そのころをしかよま
疑 心 詠
 れたるなりけり

(明治十三年) 六月十八日

(上野原発)

(中略)

九時三十分鳥沢の駅につく

行在所は井上清武が家なり。おのれらがひるの

いこひ所は白須太左衛門といへり。まだ早けれど

ひるげたうべてたちいでぬ。うへは御板こしにめさせ

たまへり。けふのみちおほかたけはしき山坂おほけ

ねはなり。午前十一時のころ、猿橋駅につかせ給へり。

この駅より廿八町余のこして、猿はしいたる。長

十七間、幅二間の板橋なり。桂川の川岸あひむか

ひて削りたてたる如き巖の上にわたせり。橋の

上より水際まで十二三間、水際より水底まで、また

十二三間ありといへり。まこと其測の水、青みわた

りて藍のいよ。橋のうへより見おるせば、めくめるめきて

危なげなることいふばかりなし。さて橋のつめに立ち

つくくみわたせば、向ひのきしのなからばかりより生

出たる木とも、あまそよそらたちて、うへうへ

しげりたる中より、一筋の滝つ瀬、ひゞきもさやに

とゞろきおつるが、これも五六丈もやあらん。いはほを

つたひてほとばしるに、其もとにすなとのりする舟

ひとつ横たはれる。筆にも詞にもおよぶべきにあら

ねど

ゆる橋の岸より落る 滝しせ 夏猶寒き 心ち

のみして うちわたりにて岸よりすこしおりて、橋の

うらを見る所あり。こよりの仰きみるに、橋柱た

つべきところならねば、両岸より巨きなる材を、扇

の並びぬくらんやうに、しきくにまき出して、橋の

けたをうけて、其うへに板をふせたり。そのたくみなる

こと、めをおどろかせり。そもくわが国、はしのめづ

安藤広重「甲斐之猿橋」



同じ構図の現在の猿橋



らかなるもの、周防の岩国橋と此はしなりけり。さ
 る中に、岩国のは、そのたくみたへにしてのどかな
 り。こののは其さまくしびにしてすこし。いはぐから絵
 に似たり、かしこのは土佐がかける筆ともいふべくなん。
 案内所者、いで、この橋かけ替てより
 三十年ばかりにもやなり侍らん。今はまたかけ替つべ
 き年頃になれりといへり。いかなる人が、かばかりた
 くみなるものをかけそめけん、そのもとのしられぬは
 いとあたらしくこそおもふに、もと東西の岸より
 枝をさし交はせる大樹どもありけん。今もさる梢
 どもものほどくかなたこなたよりおひしげれるがみゆ
 るに、かならずいにしへは大なる木ども有けんこと
 知られぬ。そのをりは、もはら猿などの梢をつたひて
 わたりしところなるべし。それにならひてつくれ
 るならん。さるゆえにゆりて、猿橋とはいひけんかし。
 かの勢田より宇治にゆく川中に、しんとびといふあ
 り。又大堰川の川上にも猿飛といふ所ありて
 をりくさるものどもとびわたるあり、といへる

⑥上

をもおもひ合すべし。或はさる橋は算はしつ云
こと葉の訛れるなりといへり。つづれまことなりや
しひぬ。

わみだれの はるゝひるまも をくひれい あぢらへ

わたる かひの猿はし じよの少し西のきしを

つたひておりゆけば、桂川と葛野川と出あつて

其水、つき出たるいはほの間を、右左にまがらて

数町のほど流れくだらて、猿橋の苔のはひまて

うちそゝへあり。けしきごとくみつ。

葛野川 水のしらなみ 岩こえて かつらに落ち

音のさやけき 川をへだてゝむかひのかたは、青き

山ども千重にかさなりて、それより上は岩殿山

よこおもてをあらはし、ふもとにはるかに賤が家ぢ

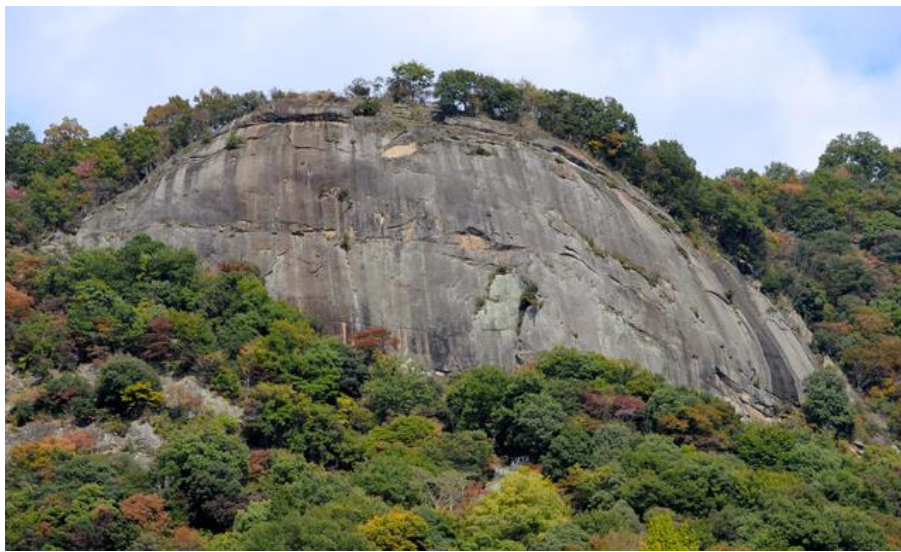
ものほのかに見えわたらたる。似るものなし。高嶺

のしら雲見るがうちにて、けしき立かはらゆへなぢ

其おもふきつくしがたし。岩殿山はじよの少し西のきしを

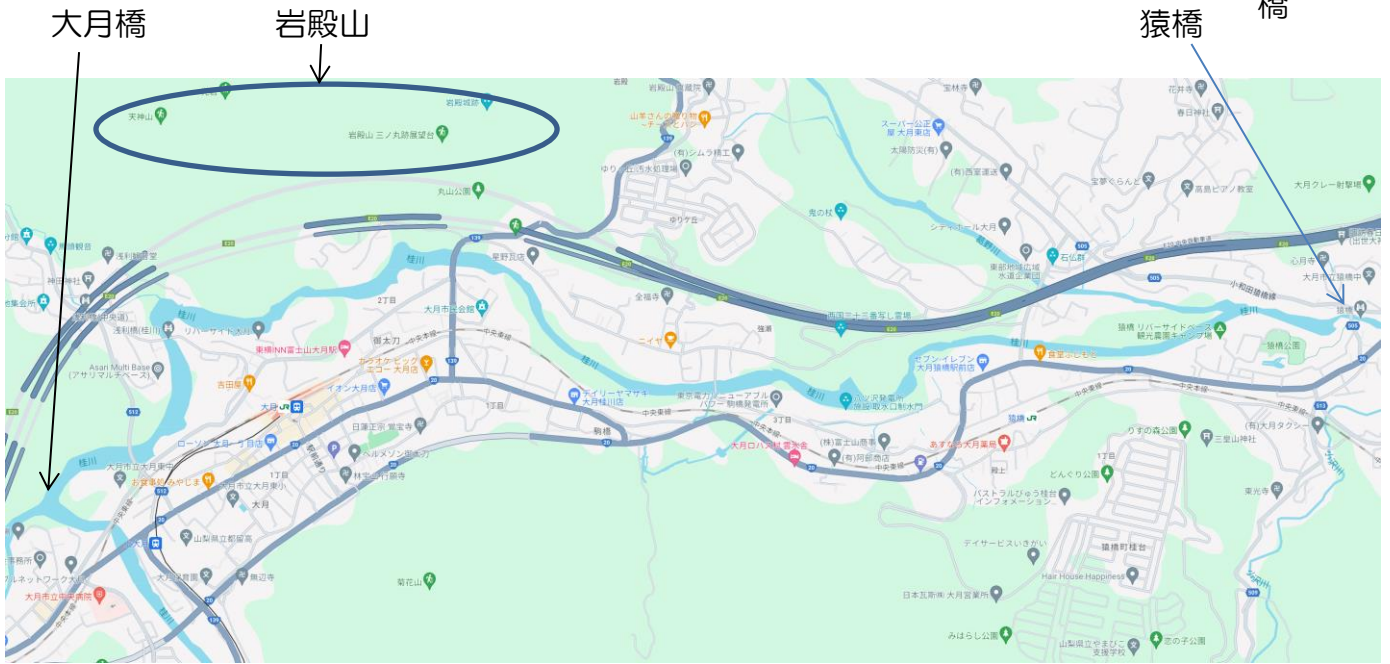
⑥下

絵図(岩殿山)



丁ばかりにして、むかし武田の土わがはら小山田信茂の居
 たる名高き城址あとなれば、ゆきみん行見ことを嚴夫に
 そのかせ峻せ、けさ今朝のほど程雨降ふりたれ、小草の
 露も深くも侍らん、ことに雲たちまよひて、又も
 降出つべき空のさまと見ゆるに、たやすくはのぼる
 べくもあらずと、とむむるに、ひと一人のさかしたち
 たらんも、かたへ片方にへきものなればとてやみぬ。う上入は
 猿橋をわたらせたまひて、御馬車くるまにめさせ給入
 り。これより大橋駅までは路たひらかなればなり
 とぞ。大橋駅まで十四五丁の間、岩殿山を右にみ見て
 ゆ行く。近くなるまよ、つつくく見るに、此山、大なる嚴、そ
 のいた頂だきに登えたるほとり辺に、松の一本本と一本本
 く曲ぬらがち立てたてゐるがいとをかかし
 朝あららし 岩いの山やまを おおろろししぎぎて 吹ふくくそそかかへへせ
 たたびびの衣手 大原村を過て大橋駅なり、千三百
 間間ばかりのく下んだり坂ありて、いと危し。車をお降ららて

ゆ行く。おり折は果てたる所に川あり。桂川の源にて大月
 橋といふあり。こ今もいとけ景し色きよ良き所なり。こと今し
 五月に此橋をかけた架りとい入云り。橋をわた渡りてか入返り
 み見れば、岸の上より滝お瀧つ。いと薄きた薄ま薄きの、岸の
 いた頂くくきよきより、の雲じ雲のやう散にち散りて、中程ほどは殊いと
 こ薄う薄く、岩角もよ良く見透え透すすく。そのすすそそは、やう上く
 厚散くなりて、いはほ散のう上へに落かさる。さながら玉を
 ち散らすやうなり。すべて此国はす少こ少しばかりの
 滝はいくつともなくありて、名付さへつかぬが付多く、
 これもそのた類ぐ類ひなり。もしみ都や都こ都近くあら
 ましかば、いかに名高き滝ならまし借を、いとあ借た
 ららし。
 大月の は光し光のひ光かり光と な光るもの は
 つ丘た丘ふ た滝ま滝の白しら白ま と云も云ら云は云ま云ほ云く云や。わた渡ら渡り
 は果てく果広里村なり。行々て花咲に來たり。此あた



花咲宿

大月宿

駒橋宿

猿橋宿

り、村々里々より人おほく出来て、れいの学校の弟子とぞ。御迎の旗たてたるところおほかれど、くだしければ、ことそきてこるやす。

いざ子ども 学びの道に おこたりて はななき

美の 折まつわれは 花咲学校の前に織屋をま

うけて、十三歳よりはたちばかりのむすめども

二十人ばかり、甲斐絹を織居たり。おもふにかの

校の生徒なるべし。其わざを、うへのみそなはした

まふべくかまへたり。